

昔
腰折雀翁
丸

上 (その一)

むかし、或る田舎の農家に、六十許の爺さんがありまして、家の孫供と一所に、庭の草を取つて居りました。

頃は春の事で、すつかり空は晴れわたつて、梅は花盛り、彼處の山からも此處の庭からも、香のよい風が吹いて来て、庭前に躍つてゐる雀等も、いかにも面白そーに、大勢の友達と運動會でもするよーな風で遊んで居りました。

其處へ丁度向うの山から、男兒等の投げた石がひゅーつと飛んで来たからたまりません、雀等はびつくり仰天。さあ大變！と一度にはら〜つと飛去で仕舞ひましたが、見ると跡に一羽の雀が腰

骨を太かに打ち折られました、翼をばた〜させながら、飛ばうとしては落ち、立たうとしては倒れ、大相苦しんで居りました。

處へ、それを見付けたのか、一羽の鷹が庭の上でぐる〜廻りながら、今にも飛下りさうにして居ますので爺さんは

『おーかわゆそー！今獲られる！』

と大急ぎに駆けつけ、大切に手に載せまして、「靴ーかわゆそー」と言ひながら、池の傍へ行つて水を飲ませ、御醫者様のように腰を撫でさすつて、孫供と一所に其れを少さい箱に入れました日が暮れると戸を閉めて眠させ、夜が明けると戸を開けて、又水のをませ米に菜等をそへてやりました。

さて又其の隣家に、意地悪の婆さんがありまし

て之を見つたものですから

『此家の爺さん等はつまらない事なさる一年を

取つた癖に小兒見たよーな小鳥飼なんかを、其れも美しい鳥ならだが、見るのも否な不具雀ぢやないか。妾等なら疾くに引剥いて焼鳥だ。いやな事〜』

など、大變な悪口で笑ひました。笑はれても惡まれても爺さんは少しも關いませぬ。日増にかわゆがつて到頭一月許経ました。

雀も段々とよくなりまして、最早跳び歩けるやうになりました。で毎日〜心の中で、爺さんの親切で命を拾ひ、怪我までも直して貰つた事をいどく嬉しく思つて居る様子でありました。

何か用事でも有つて、爺さんが他處に行く時は、家の孫供によく言付けまして、

『この雀を見てくれ、忘れずに水や米などとやつてくれ』

など、言つて置くものですから、孫供もこんな事をして、隣家の婆さんに笑はれるがとは思ひましたけれども、如何にも雀がかわゆそーにいとおいしいと思はれるので、爺さんの命通りに飼ひました。それで雀も最早飛び立てる程に直りましたから爺さんは情しそーな顔で、今度も鷹にも獲られはしまいからといふので、箱の中から出しまして、掌上に立たせて飛べるだらうかと、ずーつと手を差し伸ばして見たからたまりませぬ。ふら〜つと雀は往つて仕舞ひました。孫供は

『あれー爺さんは、飛ばしてしまつて……』
と可懐しそーに見て居りますと、爺さんも自分
で逃しはしたものの、此の間中明けても暮れて

もこの雀で心配をし、かわゆがつて来たのですから、茫然として

『あゝ飛んだ〜……又来るだらう』

と如何にも力が落ちた氣の抜けたよゝな聲で言ひました。處へ丁度隣家の婆さんが参りまして、之を見ましたから『間抜け爺が』といふ風で

『あんな鳥に逃げられて、あんな顔をする。早く食つてでも仕舞へば可いんだ。善い氣味な』と又笑ひながら、悪口をたゝきました。

(その二)

其れから十日許経て、此の爺さんの居間の軒先で、ちゆ〜〜ちう〜とどひどく雀の鳴く聲がしましたので、

『さあ来たのだらう。あの雀のやうな聲だ』獨言して、出て見た處が案の條、其の雀であり

ましたので、

『あゝかわゆそーに忘れずに来た！かわゆい事とさも可懐しそーに見て居ました處が、雀も爺さんの顔をつく〜と打ちながめて居たよゝでありました。其の口から少さい白い物を落して置いたよゝで、すーつと飛んで往つて仕舞ひました

『何だらう！落してかいた物は』

と爺さんは其處へ行つて見た處が、夕顔の種が只一つ落ちて有つたのでありました。わざ〜持つて来た様子が何となく子細あるらしいと思ひまして、其れを掌上に拾ひ上げて、見返し〜打ち眺めて居りました。

すると又丁度其處に、隣家の婆さんが見て居りました、

『馬鹿〜しい事！雀に何か貰つて其を賣のや

「になさる、あは、
、、、、」

と大口に笑ひましたが
爺さんは無頓着に眞面
目な顔で、

「これを植えてみよ

一ぞ」と庭先の畝に植えました

それが芽を出しまして、夫れから葉も出、蔓も伸

びました花も咲いて畝一杯になりました。出来た

夕顔の大きさと云つたら、實に常々の物とは違つ

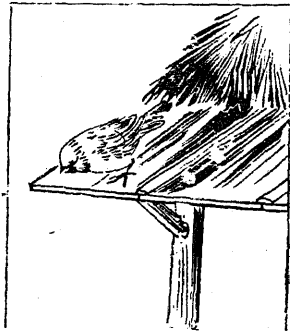
て、大きくなつたともく見た人で不思議にしな

い人は無つたのです。爺さんの悦びは一通りであ

りません。毎日く之を見て樂しみにしました。

それで段々に自家でも採つて食べ、隣家の人達に

も食はせ、採つてもくも盡させせん、夫れから



爺さんは孫供に言ひ付けまして、たびく籠に
入れて全村の家々に配らせました。夫れでもと
く食べきれないので大きいのが十許のこりまし
た。それは瓢に爲やうといふので、家の中に吊下
げて置く事に
なりました。

さて暫く経
つたので、瓢
もしつかり堅



くなり、色も變つて何如にも立派に出来たよーだから、まづ一々夫れを卸して見よーとした處が、

何だか少し重い様でありました。これは怪しいこれは變だと思ひながら、皆下して仕舞ひまして、扱其の一つを開けて見ました處が、何だか細かい種のよーな物が一杯入つて居るのです。何だらうかと他の入れ物に移して見ましたのに、何でせう其れが全然白米なので、出るともく限りも果もなく出て來るので爺さんは思ひがけないこの様にびつくりしまして大聲に子供をよんで見せると

『まわ大變、常事でない、雀のした事だ！』
と手を叩いて皆大喜びでありました。

残りの瓢も、皆同じよーに重いのでまりあしたから、爺さんの喜びは、譬へる物も無いよーで、
『まわこの瓢の白米は何時食べ盡れることたら

う』

と言つたそーであります

下(その二)

この事を聞いた人達は誰でも爺さんのよい仕合を羨まない者は無かつたのであります。中でも隣の婆さんは中々慈深の方でありまして、又其家の子息も餘程婆さんの根性に似て居りましたから、二人して毎日羨しいくと言ひ暮して居りました。或る日の事、この子息は婆さんに向つて

『隣家の爺様などは本統に羨しい事だねー、
同じ人間の事だから、家のお婆さんも何か出来
そーなものぢやないか』

と恨みらしい事を申しましたから、元來一意地
有つて居る婆さんは、何か考へたとみえ、返辭も
爲すすぐにこの爺さんの處にやつて參りました、

「婆、まあ今度は大相な事だそーで、眞にどーも御めでたう……雀にといふ事は一寸聞きましたが一体何如いふ事なのかねー」

「爺、お前様も知らしやるだらう、彼の雀がね、夕顔の種を一つ落したのを私が拾つて植ゑて出来たのさ」

「婆、そればかりぢやありません、其の雀は一体どーしたのだつたねー」

「爺さんは、匿す程の事でもないからと思つて」

「爺、なーにあの、子供が投げた石に當つて、腰を折つた雀があつたのを、私が助けて飼つてやつて其れをね、そら……御前様も知つてる筈だ。」

「飛ばしてやつたさ。其れから後で持つて来てくれた種で、あの瓢が出来たのさ」

「婆、成程、然うかねー、……其の夕顔の種を妾に」

「一つ下さらぬか」

「爺、所がね！眞に氣の毒だが、米になつた位の夕顔だから、種は無かつたのさ」

「と言はれて婆さんも仕方がなく、しほくと歸つて来て、自分も何如にかして、腰折れ雀を見付けて飼つてやらうと思ひ込んで、目を圓くして家の周圍を見廻はして居ましたけれど、腰折れ雀は一つも見當りませんでした。」

「或る朝早く起きまして、屋後の方を窺つた處が米の散つた所に雀が澤山集つて跳ねて居ました。」

「婆さんは「占めた」と小石を拾つて二つ三つぱらくつと投げ付けました。多くの雀の事ですから到頭飛べないのが出来て一羽苦んで居りました。」

「婆さんはころ／＼と駆け寄りまして、棒でもつて尙一つ腰を打つて、夫れから水や米、菜などを呉」

れなどして箱の中に入れてしまし、『もーこれで隣家の爺様のよーになれる。か併しこれ一つでは一つのだけの利徳だ。尙多かつたら夫れこそ大相な利徳だらう。あの爺様にも勝つて人々をも羨ませる譯だ』と考へましたから、

又家の周圍に米をまいて置いて置いて窺つて居りますと、雀等は何も知らないから、集つて来て食つて居りますと、婆さんは又一羽の腰を折つて、箱に入れました。夫れで二羽になりましたが、婆さんは未だ飽き足りないので又々前の様にして一羽捕りました。都合三羽箱に入れて飼ふ事になつたのであります。

一月許で皆なをりまして、飛び跳られるよーになりましたから、婆さんも大喜びで、夫々箱の外に出しましたから、雀はふら〜つと飛んで仕舞

ひました。婆さんは息子と一所に

『これで善い、甘い事をした

と喜んで居りました。けれども雀等は故意に腰を打ち折られて、あの様な窮屈な處に久しく押し籠められたのを、忌々しい事に思つて飛び去つたのであります。

(その二)

暫く過ぎて、この雀等が來ましたから、婆さんはまづ其の口に何かくはへて居るかと思つた處が、矢張夕顔の種を一つ宛落して往きました。『此れこそだ』と嬉しくつて、早速三處に植ゑました。

其れが例よりは早くする〜つと成長しまして出來たとも〜大きくつて〜魂消る程の大きさになりしました。婆さんは獨り大恐悦で、子息に向

ひまして、

「汝は大した事は出来ないと言つたよーだつたが、如何だ、これでは隣家の爺様にも負けはずかい」

と大威張でありましたが、子息も成程と思つて黙つて居りました。

で婆さんは数が爺さんのより少ない様だといふので、皆米をとらふと考へて、他人にもやらす、自分も食はずに居りました。すると子息が

「隣家の爺様は、村の人達にも分けたり、自分でも食べたりしました。家のは三つの種だから少しは他人にも食べさせたら如何です」

と言ふので、婆さんも道理の事と思つたとみねまして、隣家近所の人達にも少しづつ配り、自分も子息と一所に食べました。

さわ大變。苦くつてく其の苦さ加減は何も比ばる物はない。御藥の苦いのも、よもや此れにはと思はれる程でありました。

食べたといふ食べた人達、如何した譯か、食べた物は皆吐き出しまして、中には苦しい〜と狂ひまはつた人もありました。で其れ等の人達は皆身躰を悪くしまして。婆さんの處に集つて來まして、

「これ〜何といふ夕顔だ、怖い事〜、一寸口につけた許で我れ等は吐きもどしの苦しみに遇つた。婆様居たか」

と大腹立で口々に怒鳴つて參りました。處が此方も大變。婆さんも子息も各自に半死半生の態で食べた物は皆吐き散らし、拳を握つて苦しんで居りました大勢も驚き呆れて歸つて仕舞ひ

ました。

二三日経て、やうく婆さん等の氣分もなごつたので、婆さんは、

妾が皆米に爲よーとしたのを汝が急いで食ふ事にしたから、飛んだ災難にあつた残り
はもー決して食べまいぞ』
と子息に話して、皆取つて吊
しました。

扱暫く経てから、見ると色
も大分變つて来たから、もー
口開を爲やうといふので、子
息には米を入れる爲に大きな
箱や桶を持ち込ませ、自分は
吊してある瓢を



『重いぞ〜、中々重い大したものだ』
と言ひながら、皆下して仕舞ひました、嬉しいも
のですから、齒も無い口し
て、耳のもとまで、獨笑み
禰がけで瓢を抱へ、首尾よ
く口を開けました。

たりしましたが、婆さんは痛さも何も分らなくな

米とは思ひの外、藤、蜂
蜈蚣、蜥蜴、毒蛇、ぶん
〜等ひよろ〜ぶ〜
のろ〜出掛けた出かけた
限りも果てもなく出て來ま
して、目でも鼻でも、足で
も手でも、婆さんと子供に
取りついて、噛んだり刺し

つたのか、只米がこぼれると思つて

『待て〜雀さん、小しづ、拾ふから』

と言ひながら、毒虫の中を這ひ廻つて居る内に、他の瓢からも同じ毒虫どもが出て來た〜子息は一生懸命、手を刺され、足を噛ぢられ、狂ひ狂つて爺さんの隣家に逃込みましたけれども婆さん一人は到頭其處で盲目にされ、手も足も利かぬ不具者となつたと申しませす。

これといふのも全く慾深意地悪の報い、譬にもいふ『身から出た鎧』で、何とも致方はありません爺さんの方は之と天地でしたから、家内繁昌無病息災で、楽しい月日を送つたと申しますのも、當然の次第でありませう。めでたし〜。

(をばり)

●懸賞問答

やまとの翁

- (一) 山が多いのに山なし(梨縣とは、これ如何。
- (二) 外に在つてもうちわ(團扇)とは、これ如何。
- (三) 田の東にあつてもたにし(田螺)とは、これ如何。
- (四) さ、ない魚をさしみとは、これ如何。
- 切期限 本月十五日までに到着の中で撰ぶ
- 解答は封書に限る 封紙には婦人と子とも投稿と御記し下さい
- 女子高等師範學校附屬幼稚園内フレブル會宛
- 當撰は甘く出來たのを三等までとす。披露は第十號本誌上で、前號のと同時に

さて、第八號の解答は、いや奇々妙々、大分集つて來たのであるが、殘念な事には、編輯係りの方